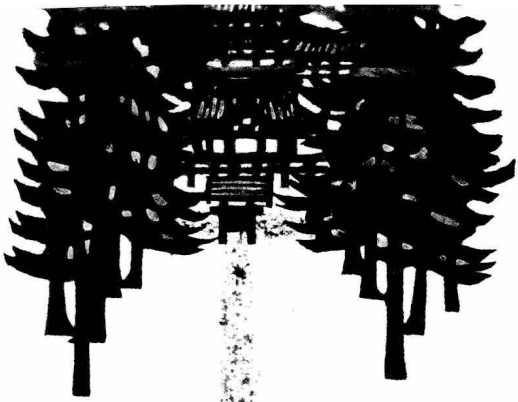
北条政子

永井路子



北条政子

永井路子

講談社

北条政子　九五〇円

著　者　永井路子

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京八―三九三〇
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

第一刷発行　昭和五十三年七月二十日
第五刷発行　昭和五十三年十月　五　日

© 永井路子　昭和五十三年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-305732-2253（0）　（文2）　Printed in Japan

目次

あしおと……五
京みやげ……一一
父と子……二〇
こがらしの館……二六
夜の峠……二九
からす天狗……四七
月下兵鼓……五六
白玉の……六六
海光る……八一
炎……八九
泣きぼくろ……一〇七
芙蓉咲くとき……一一七
白い扇……一二五

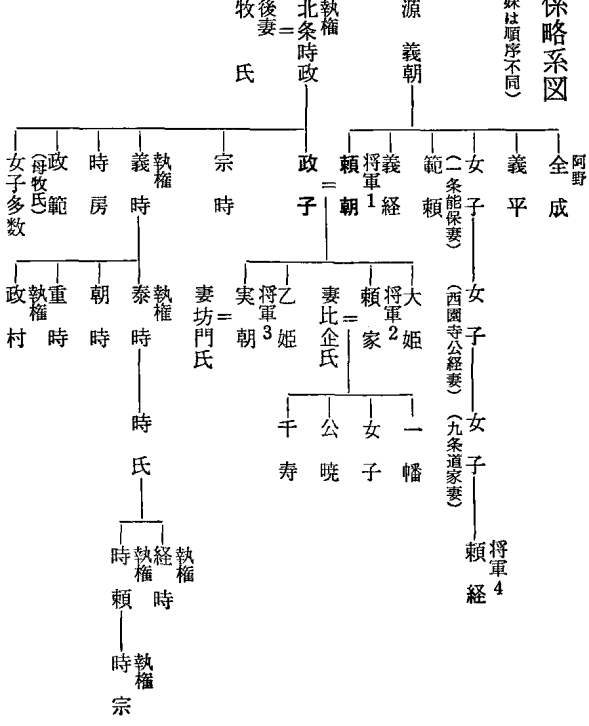
朝のひぐらし……一四〇
甲はじめ……一五一
灯の祭……一六四
野は嵐……一七四
見わたせば……一九〇
黒い風の賦……二〇三
京の舞姫……二一七
柳の庭……二三六
妄執の館……二四七
月歌……二六四
花嫁の輿……二七九
小さきいのち……二九三
幻の船……三〇〇
修羅燃え……三二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

北条政子

北条政子関係略系図

（兄弟姉妹は順序不同）



装釘　川田　幹

あしおと

ながあめは今日も一日降りくらした。
が、今夜だけは、あきもせずくりかえされる単調な雨の歌に、じっと聞き耳をたてていなければならない。
もうすぐ——。
雨の音の底から、ひそかにしのびよって来る足音が伝わって来るはずなのだから……。
あしおと……。
そうだ、まぎれもなく男のあしおとだ。年ごろの娘なら誰でも覚えのあるそれが、おくればせながら、やっと政子のそばに近づきつつあるのだ。
もうすぐ？　そうしたらどうしよう。
政子は思わず体を固くしてしまう。ふいに胸苦しいまでの激しさで、乳房から、からだのしんにかけて、痛みに似たものが走った。あわてて、ほのぐらい灯から顔をそむけたとき、もうひとりの自分の少し意地悪なささやきを耳もとで聞いた。
——おばかさん。待ってるくせに……。
政子は頬をほてらせて、それに小さく答えるよりほかはない。
——そうなのよ。ほんとうは待っているのよ、それを。待っていないと言ったらうそになるだろう。すでに二十一歳、処女は政子にとってそろそろ重荷になりかけている。
ふつう、十五、六になれば男に言いよられ、まもなく女は身ごもる。それなのに、とうとう政子は今日まで男を知らずに来てしまった。
顔立ちだって、さほどいいとはいえないが、まず人並みである。東女のつねとして肌の色こそ白くはなかったが、浅黒い皮膚の底から、ねっとりしみ出たつやがあった。なき母親ゆずりの眼は黒眼がちにすずやかで、野性の光をたたえている。
ただ口が、ちょっとばかり大きすぎるのが泣きどころで、無口な兄の三郎にさえ、
「そうだな、それだけしゃべるには、そのくらい大きくなければな」
などとからかわれたものだが、その兄だって、
「大きいけれど、それもご愛嬌だ。案外かわいげもあるしさ」
といってくれたではないか。
それに、北伊豆の北条といえば、ちっとは名の知れた土豪のひとり、多少の田畑、郎党も持っている。
こう並べると、嫁きおくれる原因はどこにもない。にも

かかわらず、現実には政子はあきらかに嫁きおくれだった。むりにさがせば、年ごろになりかけたころ、母親が病気になり、末の弟の五郎を生んだあとの肥立ちが悪くてとうとうこの世を去ったこと、その直後に時政に大番役が廻って来て上洛してしまったことなどがあげられるかもしれない。大番役というのは、地方武士たちが交替でつとめる都の警固役で、出かけたら三年はもどって来ないのだ。母の看病から葬儀、そして父の出発後は、しぜん、政子は女あるじに代って乳呑子の五郎の世話をする役をひきうけねばならなくなった。

が、そんなことは言いわけで、本人さえその気になれば、男にめぐりあう機会はいくらでもあった。じじつ、つけ文をされたり、道ですれちがって、いわくありげな流し目でみつめられたりしたことは度々あったのに、どういうわけか、それ以上に進まなかったし、そのことを格別くやしいとも思わなかったのがのんきすぎたのだろうか。

つまり、とりたてて理由もなく——というよりほかに言いようはないのである。いや、こんなふうに、なんの理由もなく、ずるずる機を逸するしまつの悪さこそ、いつの世にも変らぬ嫁きおくれというものの特徴なのかもしれないが……。

それが、この春——。

久々にいわくありげな男の文が届けられた。思わず、ぽうっと瞼のうえがほのあからんで来るような気がして、

——まだ私には恋が残されている。

うっとりしたとき、耳もとで侍女のさつきがささやいた。

「韮山のお館からですよ」

年は政子より二つ下、男のうわさをするのが大好きな彼女は、まるで自分が恋文をもらったように興奮していた。

「韮山のお館」

この地方では特別な響きを持つ言葉である。この北条とは狩野川を隔てた小高い丘陵の上に構えられたその館には、平家の代官、山木兼隆が住んでいる。本来ならこの伊豆の国でいちばん権威のあるのは、三島にある国府の役人たちのはずなのだが、伊豆にある平家の所領の管理にやって来たというこの山木兼隆は、今をときめくその平家の一門だというふれこみなので、土地の人々は別格あつかいなのである。

「まあ、この筆のあと、紙の色。ごらんなさいませ、このへんの地侍とはまるで違います」

手紙をのぞきこんでいたさつきは声を上ずらせた。そういわれれば、

ぜひ一目逢瀬を。お話したいことがあるのです。

御承諾なら襄の楓の木に御返事を……

無記名の、ごくありきたりの文句さえも、ひどく優雅なものに思われた。

「韮山のお館のどなたでしょう？　あそこには都からいらした公達がたくさんいらっしゃるから……」

さつきは目を輝かせてそう言い、しつこく政子に返事を

うながした。
短い政子の手紙に返事が来るより前に、さつきは早くも文使いの男と親しくなって、
「むこうではとてもお喜びですって」
早速様子をしらせて来た。その日以来さつきは妙にうきうきし、韮山と政子との交渉は、すべて彼女を通して行われるようになった。
そのさつきが、
「今夜あたり……」
思わせぶりな耳うちをしたのが昨日の朝だった。
いよいよ「韮山の公達」が、その名を告げる日がやって来たのである。
単調な雨脚にまじって、
ひた、ひた、ひた……。
政子の耳があきらかに人の足音を聞きわけたのは、亥の刻（午後十時）すぎだった。そしてその瞬間、政子は思わず目をつぶって、床の近くの燭を吹き消していた。
直前まで、灯を消すつもりはなかった。
はじめて見るそのひとを、ほのぐらい灯の下でじっとみつめ、やがて静かにほほえみかけて、身をなげだして激しく唇を求める——そんな恥しらずな空想が奔放にひろがっていたのに、いざとなると、処女というものは、こんなにいくじのないものか……。
だらしなく、からだがふるえる。
ひた、ひた、ひた……。
足音はさらに迫って来た。
——どうぞ誰にも気づかれませんように。
大番で父がいないのはありがたかったが、こんなにはっきりした足音では、兄や弟妹や郎従たちみんなにわかってはしまわないだろうか。
そのとき、とつぜん。
けーん。
裏山で、山犬とも狐ともつかぬ鳴声がした。あっ、と息を呑んだ瞬間、足音はぴたりとまり、雨脚は急にはげしさを加えたのであったが……。
ふしぎなことに、これをしおに足音はぷっつりとだえてしまった。いくら耳をすましても、なにひとつ聞えはしない。ひどく長いような短いような不安と焦燥の時間がすぎたあと、政子の耳は思いがけないものを聞いたのである。
女のかすかなうめき声だ。
いやおうなしに、すぐ声のありかは知れた。かすかに灯のもれる侍女のさつきの臥所——。まぎれもなく、そこから、すすり泣きともつかぬうめき声は洩れていたのである。
それが何か知らないほど政子は稚くない。思わず背筋がぴくりとふるえた瞬間、政子は足音の聞えなくなった理由を知った。
——足音は行ってしまったのだ。さつきの所へ……。
ぱあっとからだじゅうの血が燃えあがるような気がして、乳房をおさえたなり、政子はその場に突伏していた。

翌日もながあめは降りやまなかった。
思いきり悪く軒端にすがっていた白いしずくが、ある瞬間、決心をつけたとでもいうように、きらりと身をくねらせて飛びおりると、続いて、た、た、たと足早に仲間が続き、暫くすると、またためらいをくりかえす。そんな光景も、濡れそぼちた山吹が、時おり重たげに葉先をゆする庭のたたずまいも、まったく昨夜そのままだ。
政子はじっと、それを見ている。
それよりほかに眼のやりばがないからだ。
もし、予想していた通りに事が運んだら、このものうげな風景も、まるきり違った色どりをもって、その眼に映るはずだったのに。
心中べそをかく思いでもある。いやじつをいえばそんなまやさしいものではないのだ。
——私だって、あの雨だれのように、軒端から飛びおりる決心をつけていたのに……。
それなのに、残念ながら、政子は昨日のまま、依然として嫁きおくれの娘であることに変わりはないのである。
昼ちかくなって、さつきが、おそるおそるやって来た。
「姫さま……。申しわけもございません」
何をいまさら図々しい。
返事もしないでいると、
「それが、姫さま。いろいろ訳がございまして……じつは、はじめからお話ししませんといけませんのですが」
くどくどとさつきは弁解がましく並べたてた。耳はかさないつもりだったが、そのうち、
「いえ、私も、ほんとうのところ、ゆうべ使いの者にはじめて聞いたんでございますけれど……」
という言葉がふと政子の耳にひっかかった。
「え、何ですって、使いが？」
「は、はい……ゆうべ、来まして……」
頬をあからめてどもるさつきのその言葉を聞いたとき、すとんと体の中から力がぬけてしまった。
なんだ、そうだったのか。つまりあの足音は、はじめからさつきの所へしのんでゆく男のものだったのだ。
——それをひとり相撲していた私……。ふるえたり、胸をとどろかせたり、ひっくり返ったりしたことを思い出すと、耳の奥がカーンとなるほど恥ずかしかった。
さつきはまだ喋っている。
——もういいわ。おやめったら。行き違いだのなんのと言うけれど、つまりは相手にその気がなかったってことじゃないの。女にとってこれ以上恥ずかしいことはないのに、そのいきさつを聞かされるのはがまんができなかった。
「いいわ、もう」
ひどく不機嫌になっているのが自分にもわかった。
——早くおかえり。いいわけより何より今はあんたの姿が目の前から消えてなくなることが、いちばん気のきいた心づかいだってことがわからないの。
なにか言いたりなさそうな顔つきでさつきがひきさがっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

たあと、政子は長道を歩きつづけたときのようにがっくりしていた。
——やっとひとりになれた。やれやれ。
ところが、いまいましいことに、入れかわって、もう一人の自分の声が耳もとでささやくではないか。
——つまり、あんたは、ていよく、さつきたちの逢い引きのだしに使われたのさ。
くやしいけれどそうかもしれない。
——お気のどくさま。こんどもとうとう女になりそこねて。
足許のすぐそばまで来ていながら、ついと身をひるがえして引いてしまった波のように、追いかけても、もう機会はもどっては来ない。
——もてあましてるんだねえ、その体を。
やめてよ！
政子は大声で叫びそうになって慌てて首をふった。そんなことはない、そんなことは……と思いながら、もしかしたら私っていつもこんなふうに機会を逃がしてしまうのではないかと、内心不安になった。と、そのとき、また後で、さつきの声がした。
「姫さま、もし、姫さま」
「あ、まだそこにいたの」
心の中を見すかされたかとぎくりとしたが、さつきの方は、もっとおずおずとして首をふった。
「いえ、あの……お客さまでございます」

その訪問客を、あまり政子は好きではなかった。図々しくて、品が悪くて……。いや、政子だけでなく、北条一門、誰もいい顔をしない訪問客だ。
その名は安達藤九郎盛長、蛭ケ小島の流人、前兵衛佐、源頼朝の家人である。彼が北条館にあらわれるときは、たいてい何かの無心にきまっているのだ。
「いや、佐どの（頼朝）のような浮世ばなれしたあるじを持つと、なかなかつらいもんでな」
盛長は、鼻の先にしわをよせ、黄色い歯をむきだして、ひ、ひ、ひいと笑うのがくせだ。ひどい馬面で、どことなく、笑い声も馬のいなきに似ている。
「朝から晩まで読経三昧。それが十六年という根気のよさなんだから、まわりの方がまいってしまうよ」
鼻の頭をこすりながら、藤九郎は、蛭ケ小島のわがあるじをいつもこう言う。
蛭ケ小島は、北条の館の守山からは、ちょうど眼の下に見下ろされる。別に「島」ではないのだが、狩野川に抱かれた形で、いったん増水すると、すっぽり孤立して中洲のようになってしまうので、この名がある。
流されびとといっても衣食にこと欠くわけではない。重要な罪人だから、ここから程近い三島にある伊豆の国府の役人が、監視かたがた一応のめんどうを見ている。
が、それでも、時々日常の品が滞ったりすることもあるので、そんなとき藤九郎は、図々しく北条の館に押しかけ

て来るのだ。北条にしてみればいい迷惑だ。
が、藤九郎のほうは、そんなことはおかまいなしである。
「ほう、これはこれは……姫御前、いちだんときれいになられましたなあ」
いつものとおり、無遠慮にこう言い、ひ、ひ、ひい、と高調子に笑った。
「およしなさい、藤九郎どの」
「ほい、いけませんでしたか」
「それより、何か御無心か」
わざとそっけなく言うと、藤九郎は大げさに首を振った。
「これは、姫御前、心外な、藤九郎、無心ではございませぬ。米や粟なんど、そんなしみったれたものを借りる気はありませんな」
「おや、そうでしたの」
「そうとも。一寸馬を借りたいだけじゃ」
「そら、やはり御無心じゃありませんか」
「いや、ちがう、借りるといっても馬は違う」
「なぜ」
「米は食べれば消えてしまうが、馬は消えぬ」
妙な理屈をいった。じつは藤九郎の妻の実家は武蔵の比企にある。そこまでちょっと行きたいので、と言い、早手廻しの借用証だ、と何やら紙きれをとりだした。
が、それを請取ってなにげなくひらいたとき、政子の顔色が、ちらと変わった。
紙きれは、借用証ではなかったのだ。まがうかたなく、それは恋文だった。
言わずと知れた、藤九郎のあるじ、頼朝の自筆で、
「一度ぜひ、お目にかかって御話したいことがあります。御許しを頂けるならば、裏の楓の木に御返事を」
例の恋文とは、筆跡はあきらかに違っている。が、まるで今までのいきさつのすべてをのみこんでいるような気味の悪さ。
ふと政子は時おり守山の下道ですれちがう馬上の頼朝を思いうかべた。色白のはっきりした目鼻立ち。が、その眼は一度だって政子をみつめたことさえなかった。
またからかわれてるんだわ、私……
藤九郎の目の前で、びりり、とそれを裂きかけて、しかし、政子の手はとまった。
なぜか、わからない。
あとになってみれば、これが「運命」というものだったかもしれない。
もしも、これが、その日のその時刻でなかったならば、おそらく、政子は、この手紙をうけいれることは拒んだろう。そして、頼朝と政子は、おそらく、永遠に別々の人生を歩んでいったに違いない。
が、いま、まだその手紙は政子の手の中にある。
なにが政子の手をとめたのか？
前夜の事件からぬけきれずにいる、なかば自棄じみた心

のゆらぎ。そしてなによりも胸の中のもうひとりの自分が、遠慮会釈なく指さしたあのこと。

二十一歳のからだをもてあまし、みずから火をつけずにはいられないでいる政子自身！

そんなものが、ないまぜになって、両の手の働きをとめてしまったのか……。藤九郎はまだ黄色い歯をむきだして笑っている。

「よろしいかな。証文も入れましたで、馬は借りますぞ」

ひ、ひ、ひいと声高に笑ってはいるが、その眼は、ちっとも笑っていないことに気がついたのはこのときだ。

――こわいひとだ、藤九郎どのは……。

が、藤九郎はわざと声高に喋っている。

「女房めがうるそうてな。早く実家へゆけとぬかす。母者に衣を貰うてこいとぬかす。歌などよみくさって、自分では裁ち縫いもようせんのじゃ」

そのくせ、藤九郎は、自分の妻が、かつて宮仕えをし、相当の歌よみであることが自慢らしいのだ。立ちあがるとき、もう一度彼は念を押した。

「借りましたぞ。もし馬が戻らねば、証文もって取りにおじゃれ」

政子は彼の言う意味を理解した。恐らく馬は戻って来ないだろう。そして蛭ケ小島の館に、今度は政子が足音をひびかせる番なのだ、と……。

京　みやげ

――富士は伊豆。

この国の人は、みなこう、うぬぼれている。

「なんといってもこの姿のやさしさ。やはり富士はここからにかぎるて。海道をくだる道すがら、あきるほど見もしたが、これほどいい姿をしているところはなかった。なあ」

駿河あたりの人がきいたら、頭から湯気をたてて怒りそうなことを、平気で大声にしゃべり散らしているのは仁田忠常である。

大柄な髭の濃いこの若者の大声は生まれつきだが、今日にかぎって、さらにその声の大きいのは、京都警固の役を終えて、久々にご自慢伊豆の白富士と対面したからだ。

大番――京都警固のこの役は、地方武士にとっては、あまりありがたくない役目である。

北伊豆の小豪族、北条時政が、家の子郎党をひきつれ、近郷の仁田忠常や土肥実平らとともに上京してから足かけ三年、今やっと三島にある伊豆の国府に帰国のあいさつをすませ、わが家へ急ぐところなのだ。

だれの顔も日やけしている。都の朝夕に思いうかべた、なつかしい伊豆の白富士であってみれば、忠常の声に、日

ごろ無風流な北条時政までが馬をとめ、群青の秋空を背にしてそそりたつ白い峰をふりむいたのも、むりからぬことだったかもしれない。

年のころは四十がらみ、赫ら顔が直接胴にのめりこんだようにみえるのは、猪首のせいか、肩の肉が盛りあがりすぎているせいか。

特に目立つのはその鼻だ。鼻筋は生まれるときにどこかへ置き忘れて来たようだが、先端に来て、急にそのとりかえしをつけるつもりか、大ぶりの土まんじゅうをこねてくっつけたような——つまり、典型的にみごとな団子鼻なのだ。

土臭い風貌にふさわしく、その性格もいたって詩情に乏しい。酒をのめば仁田忠常に負けない大声で陽気に騒ぐ。彼の鼻が大活躍をするのはこのときである。こんもりした団子に急にしわがよったり、鼻の穴が倍くらいにふくらんだり、百面相がなんとも忙しい。

「面白いぜ、まるで別の生きものだ、あの鼻」

仁田忠常などは首をすくめて、こんなかげ口をきいている。

が、今日の時政は、その秘蔵の鼻をぴくりともさせず、すましこんで言ったものだ。

「いい景色だ。ひとやすみいたそうか」

おや、風向きが違うぞ、はて？

侍たちは顔を見合わせた。三島を出れば、北条の館はもうすぐ。一刻も早くと先を急ぐのがあたりまえなのに、さりとは悠暢な。

が、仁田忠常だけは、時政が富士をふりかえるとみせて、そっと隊の半ばに目をやっているのに気づいて、意味ありげにあごをなでた。

「なにしろ、おみやげが重いからな、今度は」

ふりかえると、馬の背で市女笠がゆれていた。ぱあっとそこだけ大輪の花が咲きこぼれたような、華やかな壺装束——大番の帰りにはふさわしからぬ、なまめいたみやげものではあった。

——大番のみやげに生きた女をつれ帰る。

伊豆をたつとき、だれがこんなことを想像したろう。時政自身だって、そんなことは夢にも思っていなかった。彼の今度の大番勤務のねらいは、まったく別のところにあったのだから。

都の警固は決してらくな仕事ではない。しかも食糧、衣料、武備はすべて自前だから、ひっきりなしに本国から運ばねばならない。その上朝廷の貴族どもには、まるで犬かなんかのように、あごで使われる。

しゃくにさわる大番勤務ではあったが、ただひとつ、いいことがあった。中央の権力者にとりいる絶好のチャンスなのだ。

せいぜいごまをすって、兵衛尉とか右馬允とか、名前だけでも中央の役人の肩書を手に入れればしめたものだ。いや、いずれも大した役ではないのだが、田舎ではこれが案外威力を発揮するし、たとえ肩書がなくとも、

「俺は右大臣何々どのとも知りあいだぞ」
このひと言がひどくききめがある。ときは平安末期、地方豪族の切りとり勝手時代だから、後楯のあるなしではずいぶんちがうのだ。
後楯として、いちばんたのもしいのは、いまをときめく平家一門だ。小豪族時政の分際では、さすがに前太政大臣清盛までは手がとどきかねたが、見こみのありそうな平家一族にはぬかりなく顔出しした。一見田舎まるだしながら、この男、なかなかぬけ目はない。いや、おとくいの鼻の百面相やえげつないおしゃべりで、案外、
——おもしろい男だ、こいつ。
貴族のうけは悪くなかったようだ。
当時、都にはこうしたごますり族は右往左往していた。そのうち時政は、このごますり仲間に、ひときわ目立つ才はじけた男を発見した。年のころは三十がらみ、いかにも都なれた物腰だと思ったら、
「池どのの駿河の牧をお預りしてますので」
自信たっぷりにこういった。
池どの——。
きいて時政はきもをつぶした。それこそ今をときめく平相国、平清盛の異父弟、頼盛ではないか。男の名は大岡時親——駿河大岡の牧というのは頼盛の所領で、彼はそこの預、つまり管理人なのだ。
「うつ……じゃあ、そのう、大岡どの……」
口ごもる時政にみなまで言わせず、
「いつでもお連れしますよ、池どのへ」
うなずいた時親という男のカンも相当なものだ。
池どの、の名前のとおり、頼盛の館は王朝ふうの池をもった大邸宅である。なにからなにまで豪奢ずくめの造りにきょろきょろしていると、突然、この世ならぬ——と時政には思われた——美女が現われてほほえみかけた。
——わ、わ、わ……人違いではござらぬか。
たしかに人違いだった。彼女のほほえみかけたのは、時親のほうだった。
——こいつ、うまいことを……。
思わず舌うちをしたとき、時親が、にやりとして、彼の耳に口をよせた。
大げさに言えば、そのときの大岡時親のひとことが、時政の生涯のひとつの転機となった、といっていい。
はじめその言葉を聞いたとき、がくっと力がぬけ、次の瞬間、今度は別の力が、もりもりと体の中から湧いてきた。
「妹ですよ、私の……」
時親はこう言ったのだ。
この世ならぬ天女は、突然、時政の手のとどく、現実の女体に変身したのである。
以来、時政は時親の妹におぼれこんだ。駿河生まれとはいえ、少女のころから都へでて来たせいか、京おんなのような、柔肌の持主だった。小柄で、かれんで、そのくせ裸になれば思いがけない胸の豊かさで、興奮すると、形のよ

い小梅のような双の突起に、さらに紅味がさして、思わず唇をおしあてずにはいられなくなる。

――このからだ、だれにも渡すものか……。

そのためには、毎夜通わなくてはならない。それまで熱心だった権力者へのごますりも、だんだんめんどうになって来た。

大番に出る直前、彼は妻に先立たれている。嬰児の世話はしっかり者の長女の政子にまかせて上京したものの、伊豆の館のことは、いつも時政の念頭を去らなかった。

それが――。

なんということか……。

新しい恋人があらわれたとたん、伊豆の館のことを、けろりと彼は忘れた。そしていよいよ大番があけて帰る段になると、今度は故郷のわが館が、意外な重さでその胸にのしかかって来た。

妻のいない現在、新しい恋人をつれて帰ろうと、遠慮はいらない。しかも、このとき、どうしてもつれて帰らなければならない「事情」が生まれつつあった。彼女が時政の子を身ごもったのだ。もういまは、

「あなたさまとなら、どこへでも――」

すっかり伊豆へ行く気になっている。

条件はそろっている。なのに、彼の胸が何となく重い理由はたったひとつ。

「恋人と政子が同い年だ」

ということだった。あらためて婚期のおくれた娘のふびんさが身にしみた。それでいて、しっかりものの政子が何となく煙たい――父親と男がないまぜになって、彼は頭をかかえこんでしまった。

思案の末、長男の三郎宗時に手紙を書いた。彼はまだ二十三だが、なかなか落着いた、頼りになる息子である。

――政子によく事情を話しておいてくれ。

さて、もうその息子はそろそろ迎えに来てくれてもよいころだ。時政が、わざとこのへんでゆっくり道草をくっているのは、じつはそのためなのだ。

と、そのとき、道の向こうに騎馬姿が浮かんだ。どうやらお待ちかねの息子の出現らしい。

騎馬姿の侍は、疾風のように近づくと、一行の前で軽々と馬からとびおりた。案にたがわず北条家の嫡男、三郎宗時だった。(北条家では上の二人が早死したので、彼は三男ながら、この家のあとつぎなのである)

「お疲れではありませんか」

相当の速さで馬をとばして来たのに、息も乱れず、山鳩いろの直垂の衣紋も着くずれてはいない。浅黒い、ひきしまった顔だちは政子に似ていて、団子鼻の親父どのとはあまり共通点がない。

がみがみ、わあわあと騒ぎの大きい父とは対照的に落着きはらった性格の、彼の前では、

「いや、なんのなんの」

手紙の一件の弱味もあって、かえって時政のほうが、へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook